海ゆかば

海軍軍医学校戸塚一期戦没者追悼録

刊行委員（五〇音順）

浦野一夫
大場一誠
○春日豊和
○神津康雄
皿井五郎
沢村献児
田中輝夫
中村善保
○福山精三郎
○保利重三
松王　喬

（○印編集委員）

海ゆかば　海軍軍医学校戸塚一期戦没者追悼録

昭和五一年五月一八日印刷
昭和五一年五月二七日発行　〔非売品〕

編集兼発行人　海軍軍医学校戸塚一期会
追悼録刊行委員会
代表　大場一誠

制作　株式会社　金剛出版
東京都文京区水道一ノ五ノ一六
電話〇三―八一五―六四一五（代）

発行所　海軍軍医学校戸塚一期会
東京都港区新橋二―二〇新橋駅前ビル一号館8階
（株）協和企画内・電〇三―五七一―三一一一（代）

海ゆかば

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

刊行にあたって

海軍軍医学校を巣立って、早くも三〇年の歳月がすぎ去りました。

この間、われら同期生の脳裏に強く灼きつけられてきたものは、祖国永遠の安泰と発展を信じて悠久の大義に殉じた戦友への深い哀しみと愛惜の念でありました。

戸塚原頭の海軍軍医学校に入校して以来、海軍生活で経験したものは、生死を越えた一事でありました。それはともに過ごした者でなければ語り得ないものであります。

うつし世に生きながらえるわれらも、幽明界を異にする護国の神も、この一事においては一心同体であります。このことを実証することが、われらに課せられた終生の責務であり、神々に応える道であると信じます。

幸い同期生諸兄、旧海軍関係の方々から、戦没同期生のありし日の姿を、それぞれお寄せいただきましたので、ここに編集してみました。

ご多忙にかかわらず玉稿を賜りました方々のお力添えに、心から感謝とお礼を申し上げます。

昭和五〇年九月三〇日

海軍軍医学校卒業三〇周年に際して

編　集　委　員　会

追悼録に寄せて

神林美治

我が日の本の国民は　如何なることをか勉むべき

唯身に持てる真心を　国と親とに尽すまで

一億動員しるしなく　国の運命極まりぬ　吾等に代りて死地につく　神の心ぞあなかしこ

終戦年経て三〇年　利己主義はびこる現代に　医療奉仕に身をささぐ　仏心ぞ尊とける

（元海軍軍医学校長）

大須賀都美次

戦没者の追悼の辞を述べるに当り自己のことから……。

始めてガンルームに入ったのが大正五年の末、舞鶴海兵団で四年目の古い中尉が二人もおり、始めは片隅で中尉連中の談話を承わっていた。一ヵ月位過ぎるとのんびりしたユーモアの道場のような感じがするようになり、われわれ新参者も何の遠慮もいらないことがわかった。

半年が過ぎて軍艦肥前乗組となった。このころにはもう一人前のずうずうしさになっていたので何の屈託もない楽しい海軍生活をしみじみ味わうようになった。

次に軍艦明石、この艦は明治三五年進水の国産艦で日露戦争に働いたもので、トン数二、四〇〇、乗員二五〇名。第一次大戦にはじめて参加することになり、英海軍指揮下でマラッカ海峡から印度洋、ボルネオ海域の警備、一応戦地勤務で対独乙仮装巡洋艦作戦の任務であるが、彼れの六インチ砲は明石の六インチ砲の射程に較べると二乃至三倍で、もし対戦したら五分間位でわれわれは海底の藻屑という次第。

戦時とはいえ、外地の勤務で暑さや食糧の不良には困ったこともあるが、そのほかはのんびりした生活で、ガンルームでも中程で、思い出のよい生活であった。

ユーモアの道場といったが、またその反面にはエキセントリックとエゴイストの個性ある人は

この生活に全く不適で、自ら早く退職する者や退職させられる者も稀れにはあった。

厳しい軍律の下には、また一面温和で涙ある面もあり民主主義の真髄とも思われるものがあったと思う。初級士官の意見でも正々堂々と述べられ、よい意見は、上長のよく聞き入れるということをしばしば経験した。これがいわゆる海軍精神の根源のように私は考える。

私は山本元帥が大佐で霞空の副長のとき大尉で、赤城艦長のとき少佐軍医長で、次は海軍次官のころ、医務局主席局員で、最後はGF司令長官のときにGF軍医長として四回奉仕したが、命令を出されるときは実に厳しく、軍医学校で講義中にも、直ちに霞空の飛行機事故の傷者の治療に、また支那事変で後送された傷者の治療に佐病へ急行せよ等の命令が急に出された。

しかし、この山本元帥の命令には、人命救助という暖かい精神の籠ったことから発せられる実に人情に富んだものであるとともに、吾々軍医科の責務を発揮させるために好機を与えられるものを感じていた。GFのころには毎日毎日がそれの連続であり、真に名提督の最高であり、海軍精神の権化ともいうべき方であったと思う。

昭和一六年一〇月一五日附で機関長、軍医長、主計長の三人は（俗称GFの三長）ともに転任となった。退艦のご挨拶に参ったとき、始めてお誉めの言葉があったが、これはかつてないことで、また退艦の日は小雨で例の帽振れの礼では長官は最後まで一人上甲板に残って振っておられた。思えば戦争の始まる二ヵ月にみたない前で心中深く考えておられたことがあったと思う。

さて皆様が戸塚の原頭に集められたときは、戦雲急は過ぎて国運危うしのころであり、われわ

れは前途を深く考えつつその任に自ら希望して就任したものの全く自信がなかった。幸い監事諸君の指導よろしきを得て、僅か六ヵ月の共同生活で思い出深いものを持たれ、今日、なお戸塚一期会の名を彼方此方に示されていることは慮外の大成果であったと思う。

現今、世相の誠に暗いものの漂うものあるにつけて、全く麗わしい戸塚一期会であると信ずる。

この戸塚のころの思い出には、なお多くのものがあるが、諸君が任官されて出発されるときは、いつまでも後姿を見送っていた。その数日前、潜水艦乗組予定者三五名との訣別の際は、相撲で優勝した三宮中尉が始めに立っていた。敬礼、答礼の後、ふと握手をかわし、次々とこれを行うちに涙がこみあげてきたので、ふと反対側をふり向いた。このときは方向転換して次に帽振れで別れたが永遠の訣別となった。

終戦後、遺族の方々にご挨拶したり、慰霊祭がなくて誠に相すまないと考えていたが、遂に機会がなかったが、戸塚一期会のあるたびに行なわれる黙禱でお許しを得たことと考えていた。このたびの追悼会には健康が許さないので出席できず誠に申し訳ない。追悼録が編纂されるにあたって、前述したような海軍の生涯を通じ感ずるところ無量のものがあります。

衷心からご冥福を祈ります。

（元海軍軍医学校監事長）

有馬　玄

東京築地の海軍軍医学校では、新任軍医科士官らの増員に呼応するため、神奈川県下に戸塚分校を建設し、昭和一九年七月から、すでに各地の医科系大学を卒業した医師、歯科医師、薬剤師らを入校させた。

この一期生は軍医科だけでも約八五〇名で、海軍はじまって以来の多人数のクラスであった。学生諸君は翌年一月卒業して実戦部隊に配置されたが、とき恰も米軍は南太平洋の諸島を攻略し西へ北へと日本本土に肉薄してくる戦況であったので、この中で戦死された戦友も三六名に達したのであった。

本年は、卒業後三〇年に当たるので六月七、八日の両日を選び、海軍のメッカ江田島で級友、ご遺族の手で盛大な慰霊祭を執行されたことは、誠に意義深いものがあったと思う。

なお前年、主として関東地方の級友の手で海上慰霊祭が行われ、私はそのフィルムを拝見し、戸塚一期会が友情に厚いのに感激していたので江田島での行事についても一層感銘深いものがあった。

戸塚分校は第一期だけが卒業し、次の在校学生は敗戦とともに復員したので、一期だけで二期

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

のない珍しい学校となった。

結局、戸塚一期会は海軍最終クラスとなり、そのことが刺激になったのか、生存会員はお人柄が立派で、誠実さに溢れ、実行力に富み、桜医会のなかはもちろん、旧海軍部内でも最優秀のグループと衆目を集めている。

霊魂不滅の哲理が真ならば、これこそ戦死された戦友の霊魂が生き残った戦友に乗り移って、一段とその活動力を拡幅しているのではないかと思われる。

戦死した級友を不運だと慰める生存戦友と、俺の分まで働いてくれと、七生報国を実践している英霊とが一丸になって私たちの面前に躍動しているように見受けられる。私は、その目的が平和日本の建設と人類の幸福増進にあることを祈ってやまない。

（元海軍省医務局第一課長、最終医務局長）

目次

刊行にあたって……編集委員会 三
追悼録に寄せて……神林美治 四
大須賀都美次 五
有馬玄八

追悼慰霊祭

慰霊祭……大場一誠 二七
慰霊祭祭文……大森重光 三〇
総会……三宮信義 三三
遺族代表挨拶……三宮信義 三三

遺稿

海軍軍医学校卒業ニ際シ所感……浅野勘解由 三七
所感……小田逸郎 三八
所感……田村和敬 四〇
軍医学校在校中、前田静子(妹)への便り……前田早苗 四三
卒業に際して……前田早苗 四七
出撃に際して……脇坂洋 四九

両親、友人への便り……邑上瑠璃夫　吾
遺　書……竹下一正　五八
遺　書……吾河久遠　六〇
ノートに書き残す……保利信光　六二
任官、颯爽の出で立ち……内藤武明　六三
故郷への便り……沼尾寿一　六七
遺歌集……竹下一正　六九

追悼録

▒分隊監事追悼の記

痛烈な想い出残る……疋田平三郎　九五
戸塚お遍路記……近藤隆造　九六
死という文字見つめる……森本正紀　一〇五
一期一会、保利信光学生……阿部久二　一〇七
悲運の分隊……木本信男　一一〇
四分隊員を悼む……大根田玄寿　一一三
みたまへの詠唱……蛯名寿家夫　一一四
遺影はなにもいわない……島筒康夫　一一五
「葉隠れ」を読む……古城雄二　一一七
出陣前に白手袋贈る……松本正夫　一一九
朝の点呼を受ける姿……松原高賢　一二〇
毅然とした勇姿……松原高賢　一二一

英霊の若桜来りうけよ……井上　武　一二

同期生追悼の記

浅野勘解由君
魅力的で異彩を放つ……名取達夫　一二三
「松の木でネェが？」……赤坂裕三　一二五
小田逸郎君
柔道二段の腕前……中邑哲郎　一二八
広島原爆に逝く……中村善保　一三〇
田村和敬君
不倒不屈の魂……池田晃一　一三四
砲艇上で銃撃を受く……中島若彦　一三五
前田早苗君
生もなく死もなし……鳥居俊夫　一三八
脇坂洋君
顎を引いた不動の姿勢……植竹公重　一四一
終戦を前に出撃、帰らず……青木高志　一四三
田村和敬君、脇坂洋君
はかり知れない運命……室賀正和　一四四
江本友三郎君
「小さな包み」の使者……吉武次雄　一四五
敷設艦に身代り乗艦……今野喜八　一四七
瀬戸武夫君

なんと重く、厳しい自由よ……安藤郁夫 一五〇
釘宮嘉郎君
海軍をすすめてくれた君……合屋長英 一五二
伝染病には弱かった……沢田又一 一五三
忘れられぬ、しのび泣き……井野寿 一五五
高橋一雄君
別れ、東京に大雪の日……宮杜享 一五七
良き医療を蘇らすために……赤坂裕三 一五八
野口望君
歓呼の声に送られて……原田栄文 一六一
内田友久君
初直撃弾、医務科に命中……大場一誠 一六三
大和出撃、そして最期……江橋節郎 一六六
無医村診療にでかけた思い出……小畑英介 一七〇
滝田孝寿君
京都の四季を賞でる……小山幸男 一七二
夢、忽然と消える彼……大原重信 一七四
誇り高き短い生涯……池田四郎 一七六
三宮幸彦君
思い出のよさこい節……皿井五郎 一八〇
三種軍装で出陣……冨川四郎 一八三
信望厚かった軍医長……向井隆昌 一八六
邑上瑠璃夫君

柔和な「ルリちゃん」……西山保一 一九〇
美しい生涯は母上のお蔭……浦野一夫 一九一
別れの笑顔のままで……村田晃 二〇〇
滝田孝寿君、邑上瑠璃雄君
両隣の戦友散華……八嶋元信 二〇一
竹下一正君
模範学生の印象……清久敏亮 二〇三
神寅雄君
厳父の参列に涙する……平形義人 二〇五
先にゆくぞ!!……峰英二 二〇七
佐藤尚弘君
大湊生活の思い出……春日豊和 二〇九
爆雷投棄中に暴発……秋野悦男 二一〇
東郷健一郎君
大和に乗艦、帰らず……堀越知之 二一三
渡辺勲君
童顔が眼に浮かぶ……吉田宗夫 二一五
初陣に散った若武者……黒田一夫 二一六
今川賢一郎君
日本再建にかける……田中正志 二二〇
吾河久遠君
回天特攻隊を載せて……大田信五 二二六
海空特攻隊が呼応……福山精三郎 二三一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com